

日本における古代エジプトコレクションとその保存

鈴木まどか

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2005年9月30日 受理)

1. はじめに

エジプト学最大の課題は遺跡・遺物の保護や救出である。過去30数年間にわたって日本におけるエジプトコレクションを調査研究し続けてきた筆者にとって、今日ほど同課題に対して早急に何らかの救出手段が講じられるべき時がきたと痛感する時はない。日本のエジプトコレクションの中には遺物の劣化が目立つからだ⁽¹⁾。即ち30年以前に初めて接した時とほぼ変わらない比較的安定した保存状態の遺物がある反面、劣化の極めて著しい遺物、更には劣化を遅らせようと保存処置を施したものの見るかげもなく変色しただけで劣化を阻止できなかった遺物が存在するのである。後者の場合に、その責任を単に保存処置を施した修復家のみに帰してはならない。このような事態を招いた真の要因は、先ず何よりも我が国に古代エジプト遺物を専門とする修復技術者が欠けている点にある⁽²⁾。そして更なる要因を究明するならば、在日エジプトコレクションの成立過程から解かるように我が国特有の分散した所蔵状況という歴史的理解上の要因、更には修復家・学芸員・考古学者という3者の連携欠如という社会的要因を挙げねばなるまい。そこで筆者は、先ずエジプトコレクションの成立過程を明らかにし、次いで遺物の劣化の現状を略述して問題点を明らかにする。次いでこれらの問題点を解決するために、筆者が提案して現在実施されているエジプト石造遺物の保存処置を報告し、我が国におけるエジプト遺物の劣化対策についての私見を述べることにする。というのも、古代エジプト遺物専門の修復技術者の養成への道りは長く厳しいのに対して、遺物の劣化の進行は急速に進みつつあるから。

2. 日本におけるエジプトコレクション

最初に日本にもたらされたエジプト遺物は、2体のミイラと棺であった。1体は、1888(明治22)年に東京帝国大学医科大学(現在の東京大学医学部)の解剖学教室によって購入され、他の1体は、1904(明治37)年に当時のエジプト考古庁長官G. マスペロ(Gaston MASPERO, 1846~1916)により、東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)に寄贈されたものである⁽³⁾。前者については、近代的学問としての日本医学は、明治初年から欧米より移植された西洋医学であったが、この学問が急速に発達した背景にはエジプトのミイラを記述した大槻玄沢(1757~1827)達の江戸時代後半期の蘭語による西洋医学の蓄積が

地盤をなしていた事実を伝える。一方后者は、寄贈後間もなく欧米の考古学を意識した皇室博物館学芸員達によって棺の側面を切開してミイラ本体を露出させて、翌年には医科大学のミイラを納めた棺と共に同博物館歴史部で展覧された。近代日本医学と同様に明治時代初頭以来、その研究が起こった日本考古学も、やはり江戸時代に高水準に達していた国史や国文研究の影響下にあったものの、その主流は欧米の考古学に繋がるものであった当時の学問状況を明白に示す。

以上の2遺物が単発的に収集された時期に前後して、明治20年代以降に欧米より導入された考古学が日本の教育制度に出現して、考古学教育を起点にもつ規模のことなる3つの本格的エジプトコレクションが明治時代末期から大正時代にかけて形成されていく過程を把握することは極めて重要である。これらの3コレクションとは、先ず1908~1913（明治41~大正2）年にかけて横浜正金銀行ロンドン支店に勤務していた折に武内金平（1872~1960）が入手したコレクション（以下武内コレクションと記す）、次いで京都帝国大学文学部（現在の京都大学文学部）で教鞭をとっていた濱田耕作（1881~1937）の英国発掘財団（Egypt Exploration Fund）への資金援助の見返りに1911（明治44）年以來同大学文学部が受領したコレクション（以下京都大学文学部コレクションと記す）、そして倉敷紡績社長・大原孫三郎（1880~1943）の支援のもとに洋画家・児島虎次郎（1881~1929）が収集したコレクションである。

1895（明治28）年に久米桂一郎（1866~1934）は、東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）に新設が予定されていた西洋画科（設置は翌1896年）のために囑託された「西洋考古学」の授業の中で本格的なエジプト考古学の講義を開始した。（図1：久米桂一郎講義メモ参照）東京大学文学部の考古学講義の開始は1910（明治43）年であったので、



図1 久米美術館写真提供

人文科学として本邦初の久米による西洋考古学講義がいかに先端的であったかを知る⁽⁴⁾。筆者は、武内コレクションと児島虎次郎収集のコレクションとの成立経過の原点部分に東京美術学校における久米によるエジプト考古学教育が所在していることに気付かされた。

先ず前者についてだが、筆者は、武内が同校での久米の考古学の講義に用いる標本としてエジプト遺物を購入した可能性が高いと推測する。これを裏付けるように武内コレクションは、長く東京美術学校に標本として寄託されていたが、太平洋戦争後の1948（昭和23）年に河村幸次郎（1901~1994）の所蔵となり、河村の寄贈により現在は下関市立美術館に所蔵されている⁽⁵⁾。シャブティなどの葬祭品を中心とする武内コレクションは、小規模ながら日本で最初のエジプトコレクションであり、主に美術家に啓蒙的役割を果たしたコレクションとして重要である。現在、筆者は、下関美術館所蔵の古代エジプトコレク

ションの調査結果を同館の紀要に発表する準備を進めている。

一方後者は、画業のために3回の滞欧生活を送った児島が1919～1921（大正8～10）年と1922～1923（大正11～12）年との第2回・第3回滞欧中に日本に西洋画を展示する美術館を設立するための西洋画収集の合間に入手したものである。とはいえ大半のエジプト遺物は、第3回滞欧の当初にパリの考古商カレブジャン（KALEBDJIAN）を通して当時競売にかけられた高名なマクレガー（William MACGREGOR）コレクションとフケ（Daniel Marie FOUQUET）コレクションの中の陶器類を入手したのを皮切りに、ヨーロッパとエジプトで集中的に購入された。このような短期間の収集を可能にしたのは、東京美術学校西洋画科（選科）出身の児島が久米の西洋考古学講義を通してエジプト考古学の概念を身につけていたからに相違ない⁽⁶⁾。1930（昭和5）年に、児島の画業を支えた大原孫三郎は、前年死去した児島の遺志を継いで倉敷に「大原美術館」を設立して、エジプトコレクションを含む西洋画コレクションを一般公開した。その後エジプトコレクションの1部は、大原美術館から児島の遺族に寄贈されたが、1971年に児島の郷里である岡山県成羽町に児島の作品を中心とした美術館が創設された折に展示され、間もなく遺族が同コレクションを同館に寄贈して今日に到っている。ペルシアやイスラム陶器に魅了されていた児島は、古代エジプト陶器収集から入って、エジプトコレクションに熱中する。このような経緯から、日本で他に類例がない充実したエジプト陶器コレクションが成立した。大原美術館は、新王国時代初頭の世界に数少ない逸品などの各時代の陶器を、成羽美術館は、新王国時代の王名入りの貴重な陶片をはじめとする重要な陶片を所蔵する。（大原美術館・児島虎次郎記念館所蔵；岡山県高梁市立成羽美術館所蔵）⁽⁷⁾

京都大学文学部コレクションは、濱田が1913（大正2）年から4年間ロンドンでエジプト考古学の父とされるロンドン大学教授W. M. フリンダース＝ピートリ（William Matthew Flinders PETRIE, 1853～1942）の指導下に考古学研究の方法論を学び帰国、京都帝国大学文学部にはじめて考古学の講座を開設して日本での科学としての考古学を体系付けた折のゆかりのエジプト遺物である。W. M. F. ピートルの発掘した遺物であるだけに出土地も明らかな、日本最大のエジプトコレクションである。（京都大学文学部所蔵）

児島の収集したコレクションと京都大学文学部コレクションとは、質量ともに大きな差があるものの、考古学的視点に立ち、先王朝時代からギリシア・ローマ時代に到るエジプト史の各時代を網羅しようと試みた教育的配慮を見せる本邦にとって画期的コレクションである。

1923（大正12）年以降、国内への新たなエジプト遺物導入が加わる。東洋美術の世界的考古商・山中定次郎（1866～1936）がエジプト遺物を含む古代遺物の大規模な展示即売会を東京と大阪で開催したからだ⁽⁸⁾。その後、他の類似の展示即売会も催されて雑多なエジプト遺物が収集された。

昭和5（1930）年以後に、古代エジプト研究に進展が見られる。本邦初の本格的エジプ

ト学者・岡嶋誠太郎（1895～1948）が古代エジプトに関する学術記事を京都大学の定期刊行物に掲載し、また同時期に天理教二代真柱・中山正善（1905～1967）が、エジプト学の誕生を促進した大刊行物ナポレオン皇帝版『エジプト誌』（初版）を購入したからだ。1943（昭和18）年に岡嶋は、著書『ナポレオンとエジプト』を天理時報社から出版し、この『エジプト誌』の図版を使用してナポレオンのエジプト遠征からシャンボリオンのヒエログリフ解読までのエジプト学の誕生過程を略述した⁽⁹⁾。

第二次世界大戦後に、神話的伝承に偏った日本史の再検討から実証的科学研究が叫ばれ、歴史研究への考古学的研究方法が国民的支持を得る⁽¹⁰⁾。加えて戦前に朝鮮半島や中国大陸、台湾、樺太などにおいてのフィールドワークで不朽の成果を挙げた学者達（江上波夫、三上次男、水野清一など）は、フィールドを失って調査の対象地を中近東諸国に替えねばならなくなった⁽¹¹⁾。このような変化は、1951年以後、以下に列挙するような多くの新たな動向に示される。

- a. 1951（昭和26）年、考古学者・角田文衛により京都に古代学協会（the Paleological Association of Japan）が設立され、次いで1954（昭和29）年にはオリент学者・三笠宮崇仁殿下が東京に日本オリент学会（the Society for the Near Eastern Studies in Japan）と命名したエジプト・中近東諸国を研究対象とする学者の団体を創設するに到る。三笠宮殿下の発意に賛同した二代真柱・中山正善は、天理教の海外布教のために戦前に設立した天理大学（当時の天理外国語学校）附属天理図書館に古代エジプト・オリент専門の学術書を、また1953（昭和28）年からは同大学付属天理参考館（戦前の海外事情参考室）にエジプト・オリент考古資料を収集することに熱意を燃やした⁽¹²⁾。
- b. このような目覚ましい学者らの積極的な活動に拍車をかけることになったのは、エジプト遺物を含む個人コレクションを基礎として私立美術館へと発展した施設が次々と設立されていったことである。東京では、1952（昭和27）年ブリヂストン創業者の石橋正二郎によるブリヂストン美術館が、1966（昭和41）年には出光興産店主の出光佐三による出光美術館が、1975（昭和50）年に実業家・松岡清次郎による松岡美術館が、そして1968（昭和43）年には、考古学者・江上波夫を館長とする古代オリент博物館が、更に埼玉県には、遠山記念館が開館していった。この時期に国民の増大する古代エジプト・オリент美術に対する興味に答える形で、中国・日本の古美術を収集してきた大阪市立美術館は、1952（昭和27）年頃にエトルリア、古代ローマの陶器を購入した後に、コプト染織品や石彫を含むエジプト遺物を購入した⁽¹³⁾。
- c. 1958（昭和33）年には、在日コレクションの中から古代エジプト・オリентの遺物を集めて、中部日本新聞社主催の「古代オリент芸術展」と題する展覧会が名古屋で開催された⁽¹⁴⁾。1963（昭和38）年にはカイロのエジプト博物館の至宝を展覧する「エジプト五千年展」が、また1965（昭和40）年には「ツタンカーメン展」が東京

と京都で開催され、エジプト美術は日本国民の心をつかむ⁽¹⁵⁾。この2展覧会は、今日のように、ほぼ毎年開かれる国外の著名な博物館所蔵品で構成される大規模な古代エジプト展に大衆が殺到する端緒となった。

- d. 日本オリエント学会の設立後の1956（昭和31）年に、東京大学イラン・イラク調査団（団長・江上波夫）などの中近東をフィールドとする考古学研究が開始されたが、エジプトでの現地調査の開始は遅れ、1971（昭和46）年に早稲田大学の調査隊（隊長・川村喜一）が西テーベで発掘調査に着手した。同大学は、その後も現在にいたるまで西テーベのマルカタのアメンヘテプ3世宮殿遺跡以外にも、王家の西谷やメンフィス地方のアブシールやダハシュール北部でも目覚ましい成果をあげている。筆者自身についていえば、1981（昭和56）年から5年間、古代学協会・平安博物館の中部エジプト・アコリス遺跡での発掘調査を開始して、その調査隊長をつとめた⁽¹⁶⁾。その後同遺跡は、筑波大学の調査団に引継がれている。

以上のように大英博物館、ルーヴル美術館、ベルリン博物館などの欧米の高名なエジプトコレクションとは比較にならないものの、19世紀末以来、我が国においても様々な材質の多数のエジプト遺物が公立および私立のコレクションに所蔵されてきた。欧米のコレクションが、各所蔵国でエジプト学の国際的發展に寄与しつつ形成されたのにたいして、我が国のコレクションは、近代日本の医学、考古学、美術などの発展に間接的に貢献してきた側面が強い。1930年代に入ると古代エジプト研究に着手する動向は確かに存在したが、本格的なエジプト学研究的萌芽は、第2次世界大戦後の1954年に日本オリエント学会が設立された以降といえるからだ。

エジプト学研究的蓄積の浅い日本では、エジプトコレクションは所蔵する博物館・美術館の中心的コレクションを占めることはなく、常に位置付けの曖昧なコレクションと見なされる傾向にあったようだ。従って、これらの所蔵機関には古代エジプトを専門とする修復技術者はおろか、エジプト学専門の学芸員はいないのは当然だろう。加えてこれら小規模なエジプトコレクションは、日本各地に散在しているので、エジプトコレクションを所蔵する機関の学芸員同士がエジプト遺物に関して密接に情報交換しにくい状況にあるのが実情といえよう。コレクションのエジプト遺物の劣化状態に接する所蔵機関の学芸員たちの不安や心痛は想像に難くない。筆者は、高梁市立成羽美術館の学芸員よりギリシア・ローマ時代のエジプト陶製品の劣化の相談を受け、これを典型的塩類風化と診断した。（図2参照）



図2 高梁市立成羽美術館写真提供

3. 塩類風化による石造物の劣化

博物館・美術館のコレクションの遺物は、大切に保管されて今日に到っている。しかし

エジプトと全く異なる気象条件の中で長期間所蔵されてきた遺物のなかには劣化状態を示すものも少なくない。孤立しているにもかかわらず学芸員たちは、勇気を持ってエジプト遺物の劣化に対処してきた⁽¹⁷⁾。とはいえ本稿で取り上げるように特に処置の困難な劣化状態の遺物が所蔵機関を悩ます場合も稀ではない。そこで先ず在日エジプトコレクションの最も典型的な遺物の劣化である石造物の塩類風化を取り上げ、そのメカニズムを略述して、保存対策を述べることにする。欧米では、伝統的に石材が建造物や彫刻に使用されてきたために、昔から常に石造物の劣化に直面して保存対策に努めてきたのに対して、我が国では木造の建造物・彫刻が圧倒的多数を占め、石造物の劣化に真正面から取り組む機会がなかったため、石材の取り扱いに不慣れな傾向が否めない。

博物館・美術館所蔵のエジプト出土石造物は、埋蔵時に地中の可溶性塩類の浸潤を受けており、発掘後に石材内部の塩類が徐々に石材表面層に移動して析出する。地中では外気の温度や湿度がほぼ一定しているので石材内部の塩類は移動しないが、出土すると外気の影響を直接受けるからだ。即ち石材内部の水分は、湿度が内部より低い場合や温度が内部より高い場合には硫酸カルシウム、炭酸カルシウム、塩化ナトリウム、塩化カリウムといった析出物を残して蒸発する。このような浸潤と乾燥とを頻繁に繰り返すと石材内部の塩類が表面層へと移動し、やがて塩類の結晶が表面層の微小空隙の中を満たすが、結晶化が更に進行すると、微小空隙中での結晶化に伴う体積の膨張により損傷を引き起こすのである。こうして浮彫の施された石造物の表面が粉状化し、脱落して展示用架台の上に堆積している場合や、石材表面層が劣化の進行によって、粉状、粒状、小片状に剥離して脱落して石造物の周囲に堆積するのが見られるに到る。(図3参照) このような損傷は、日本での出土遺物については比較的少ないが、エジプト、中近東、中国など乾燥地帯での出土遺物については多く、そのための保存対策は極めて重要である。損傷因子を含んだ遺物が乾燥地帯から高湿度の日本へ持ち込まれるので、塩類風化が顕著に現れるからだ。



図3

この種の損傷を受けた石造物の保存対策とは、まず何よりも劣化を引き起こした要因である塩類を除去する脱塩処理を実施せねばならない。そして劣化により石材表面層が凝集力を失っている場合には強化する必要がある⁽¹⁸⁾。

4. 下関市立美術館所蔵石造物の劣化と過去の保存処置

(経過)

2004年2月にルーヴル美術館エジプト部門のCh. ジグレル (Christiane ZIEGLER) 部長が翌年日本開催予定の古代エジプト展の下準備として来日して、日本各地に所蔵されているエジプトコレクションを見学し、コレクション中の劣化遺物を見て、同行した筆者

にエジプト遺物を専門とする日本人修復家の養成を促がした。特に山口県下関市立美術館においてジグレル部長は、井土誠館長に同館所蔵の劣化石造物救出のためにルーヴル美術館エジプト部門専属の修復家の協力を申し出た。2005年にルーヴルの修復家が古代エジプト展のために来日する予定が決まっていたからだ。

こうして、2005年3月20日にルーヴルのエジプト部門専属のM. F. = ド・ロジエール (Marie Françoise de ROZIÈRES) 修復家が下関市立美術館で劣化の著しい石造物を直接調べて、筆者に救出計画の下準備として事前テストを実施するように助言したのである。事前テストは下関市立美術館の岡本正康学芸員により、3月から5月にかけて実施された。

同年5月28日にド・ロジエール修復家は、再び下関で前回に指示した事前テストの結果をふまえて、石造物救出のための修復計画を決めて、この時以来、筆者と下関美術館の学芸員とのチームの救出作業は時間をかけながらも着実に実施されている。

〈過去の保存処置〉

同石造物に対しては過去3次にわたって日本の修復家による本格的な修復処置が実施されたが、いずれも以下のように不成功に終わった⁽¹⁹⁾。

1986 (昭和61) 年から翌年にかけての第1次修復処置については、詳細な記録が残されていないが、まず湿布式の脱塩処理が施された後に、恐らくアクリル樹脂 (商品名: パラロイドB-72) と推測される樹脂を吹き付けて浮彫された石材表面をコーティングした。しかし再び石材表面層が部分的に薄片剥離を起こし、或いは粉化して落下し始めた。

1994 (平成6) 年の第2次修復処置では、可溶性塩類の結晶が表面の彫刻面と一体化して皮殻を形成している状況から、脱塩処理を施さずに、クリーニングと表面部で凝集力を失っている箇所にあクリル樹脂 (商品名: パラロイドB-72) で予備強化処置を施した上で撥水性シリコン樹脂溶液 (商品名: SS-101) の含浸処置を施した。即ち石材中の塩類が溶解、再結晶を繰り返しながら表面層へと移動するのを阻止するために、強化樹脂を石材中に深く浸透させることにより石材内部の塩類の結晶を石材と共に固定化する処置である。同処置の1年後に、再び石材表面層に塩類結晶の発生を確認する。

1996 (平成8) 年から2003 (平成15) 年にかけての第3次修復処置では基本的には第2次修復処置と同一の処置が繰り返されたにとどまる。この間の1999年から2000年にビニロンシート製パッケージを作成して、石造物をその中に入れ、更に防湿剤アートソープを40% (RH) に設定して、パッケージ内部に入れたところ、2001年には激しい塩類の結晶化で表面層が剥離する傾向をみせたので、アートソープを取り出し、数回の樹脂溶液 (商品名: SS101) を表面に塗付する。以後、石造物はパッケージ内部で「小康状態」を保つ。筆者がジグレル部長と共にこの石造物の劣化状態を最初にみて衝撃を受けたときは、この状態であった。一見して著しい塩類風化による劣化であることが了解された。

5. 今回実施した再度処理

〈過去3次修復処置での問題点〉

筆者は、考古学者として長く修復現場に携わってきただけに、第1次修復処置の報告書中で湿布式の脱塩処理に費やした時間の短さが気がかかった。通常の脱塩処理だけでも石造物の寸法から最低1年以上は必要と思われたからだ。加えて、この石造物は、元来地下にあっただけに、石材内部の塩類の濃度は、通常よりかなり高いと推定されるからである。従って、第1次修復処置での脱塩処理は、石造物の表面層の塩類を除去したにすぎないと考えられる。脱塩処理が不十分であったために劣化を阻止出来なかったのである。

また、石造物の樹脂含浸をおこない劣化要因である塩類の石材の表面層への移動を阻止するという第2次・第3次の修復処置については、他のエジプト石造物での成功例があるらしいが、既に第1次修復処置を施した当該石造物では難しいものと思われる。というのも第2次・第3次の修復処置での樹脂含浸は、修復家が含浸処置後に石材表面でアクリル系樹脂の粘着糸で確認しているように、第1次修復処置でのアクリル樹脂の残存により不十分な浸透であった可能性が考えられるからだ。ただし筆者は、同修復家が石造物の色合いを損ねないために浸透処置を控えめに実施した点を評価する。こうして後述のように我々は脱塩処理を容易に進めて効果を見極めることができたのであるのだから。

〈再度処理作業〉

前述の〈経過〉で述べたように本処置に着手するに当たって、まず浮彫の施されていない箇所では石材の事前テストを実施した。(図4：事前テスト中の岡本正康学芸員参照)第2次・第3次の修復処置での樹脂の残存状況を調べて今回の救出のための本処置の方針を決めるためであった。即ち、樹脂除去処置を施した箇所と同処置をしない箇所とで蒸留水による湿布式脱塩処理をおこなって、



図4 下関市立美術館写真提供

両者の脱塩処理効果を比較したのである。結果的には、幸いにも過去の処置で含浸した樹脂は石材には殆ど残存しておらず、樹脂を除去しなくても十分に湿布式脱塩処理の効果が得られることが判明した。湿布式脱塩処理とは、蒸留水を浸した中性パルプ(吸い取り紙・パルプ)で石造物を包み、溶け出した塩類をパルプに吸着させる処理である。即ち石材の表面に蒸留水で湿らせた吸い取り紙を密着させて、その上に蒸留水を含ませて固形化したパルプを載せて室温でパルプを完全に乾燥させる処理を1サイクルとして、これを5月末以来5回繰り返している。脱塩処理の評価は、当然ながら新たな塩類結晶が抽出するか否かで行なう。処理は、抽出物重量測定と抽出物のX線回折分析により、塩素イオン量と抽出物重量とが一定の値を示すまで続ける。現在までの湿布式脱塩処理では、使用済みの吸い取り紙を蒸留水に浸して紙の吸着物質を水中に溶出させた水溶液で簡便なバックテスト

(共立理化学研究所)を行ったところ、比較的高濃度の塩化物が溶出していることが判明した。また同水溶液中のイオン量を電気伝導計で調べたところ、湿布式脱塩処置の1回目と2回目とではイオン量が激減していることが明らかになり、脱塩処理の効果が再確認された。これらの処理は、最終的報告書の中で詳しく述べる予定である。

ド・ロジエール修復家は、既に事前テストの段階からビニロンシートを取り除いて保存するよう指示した。エジプト金属製品などの余程劣悪な保存状態の遺物でもない限り、修復家は劣化遺物を収蔵庫や展示室での外気との接触の中で安定を保っていけるよう加工することをめざすのが一般的であるからだ。ド・ロジエール修復家は、石造物の劣化の程度からビニロンシートが不必要であると判断したものと思われる。

6. おわりに

明治時代以来、エジプトコレクションは、分散した状態ながら一般に予想されているより数多く日本各地の公立および私立の所蔵機関に保存されている。欧米のコレクションが、研究対象として国際的学問であるエジプト学の発展に大きく貢献しながら形成されてきたのに対して、これら日本のコレクションは、明治時代に欧米から移植された近代的諸学問を日本に根づかせる目的、換言すれば啓蒙的参考資料として収集されてきた歴史的経緯がある。そのためエジプト学の立場からの在日エジプトコレクションの調査や研究は少なく、その保存対策も遅れている。日本におけるエジプト学研究の本格的開始は、第二次世界大戦後に日本オリент学会が設立された1954年以降と研究の歴史が浅いからだ。しかし日本のエジプトコレクションは、日本の近代的な学問の発展過程を辿るうえばかりではなく、現在華々しい成果を納めつつある日本のエジプト学研究の基盤を固めるうえでも、また世界中のエジプト学研究者に研究素材を提供するうえでも保存されるべきである。

ルーヴルの修復家と筆者の指導下で下関市立美術館の学芸員による石造物保存処置の実施例は、専門家の立会いのもとで学芸員による劣化遺物の救出が極めて有効であることを示す。同美術館では現在も石材の脱塩処理を続行中であり、やがて今回の処理で可溶性塩類が殆ど検出されなくなって展示されたにしても、再び劣化が起こる可能性も全くないとはいえない⁽²⁰⁾。その場合にも筆者は、学芸員達が専門家と連絡をとったうえで脱塩処理を再開して、石材から全ての塩類の除去を達成するまで何回も処理作業に挑戦することが肝要と考えている。特に脱塩処理といった長期にわたる保存処置は、劣化遺物に日頃から接している学芸員の協力があってこそ完璧なものとなろう。

将来的には、日本にも古代エジプト遺物を専門とする修復家の育成が望まれる。ただし遺物の劣化が進行している現時点においては、その保存修復は、修復家、学芸員、考古学者の3者の適切な連携により、かなり多くの劣化遺物が救出され得るであろう。筆者は、我が国のエジプトコレクションの分散した所蔵状況から、エジプト遺物を保護するために修復家、学芸員、考古学者の連携組織の構築を考えている。

註

- (1) 昨年9月にフランスのグルノーブルで開催された第9回国際エジプト学会議 (IXe Congrès International des Egyptologues) で、“Les Antiquités égyptiennes conservées dans les musées nationaux et dans les collections privées au Japon”と題して日本の古代エジプトコレクションの成立過程、歴史的意義、考古学上の位置付けを明らかにした。その折にも当然ながらコレクションを後世に伝えるために遺物の劣化対策を取る必要性を強調した。
- (2) 古代エジプト遺物専門修復技術者の養成の必要性については、筆者が全く携わらなかった展覧会であったが、在日エジプトコレクションからの展示遺物で構成された「古代エジプト文明3000年の世界」展が本年2月から9月にかけて日本各地を巡回したが、その折に展覧会企画者の南博史氏からお話があったので「エジプト学の課題・専門修復技術者の養成は急務」と題した拙文を同展覧会の図録に掲載させて頂き、この必要性を一般の方々に訴えた。図録『古代エジプト文明3000年の世界』京都文化博物館、京都、2005年、p. 209参照。
- (3) 東京大学医学部解剖学教室所蔵のミイラ・棺については、拙稿「ペンヘヌウトジウウの木棺について」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』角田文衛博士古稀記念事業会、京都、1985年、pp. 665-667参照。東京国立博物館所蔵のミイラ・棺については、拙稿「東京国立博物館所蔵パシェリエンプタハのミイラとカルトナーージュ棺」『考古学雑誌』第83巻第4号、1998年、pp. 1-19参照。
- (4) 東京大学考古学授業の開始については、斎藤忠『日本考古学史』p.117参照。また、久米による「西洋考古学」の講義内容は、久米自身による講義メモおよび東京美術学校生徒による筆記ノート（万鉄五郎、尾崎彦磨など）からかなり正確に把握できる。現在筆者は、この講義内容を調査中であるが、序論としてシャンポリオンのヒエログリフ解読から始まるエジプト学に言及するなどフランスにおける伝統的エジプト考古学の講義に近い内容であり、当時の生徒にとっては新鮮なものであったようだ。
- (5) この推測は、美術学校では広く知られていた武内金平のエジプトコレクションが、遺族に全く知られていなかった事情からも裏付けられるだろう。これは、遺族が彼の能面や能の楽器、硯などの中国コレクションについては熟知していた事情とは対照的である。武内コレクションは、家族の目に触れずに常に東京美術学校に寄託されていたらしい。久米と武内の出会いは調査中であるが、武内コレクションが両者の個人的交流から成立した可能性は高い。久米は、武内のロンドン在勤中の1910（明治43）年に日英博覧会出品協会の美術部審査などでロンドンに滞在し、武内が久米への友情からエジプトコレクションを購入したとしても不思議ではない。両者共に能をたしなみ終生家族ぐるみの濃密な交流を続けていたのである。
- (6) 児島が短期間に収集したエジプトコレクションは、大原美術館・成羽美術館の2館のコレクションを併せてみると、欠落する時代はあるものの先王朝時代からギリシア・ローマ時代までの遺物を集める。これらを収集する折に、児島は各々の遺物の年代を正確にメモに書き残すなど、久米による考古学の授業の片鱗を見せる。
- (7) 筆者は、『大原美術館紀要』第2号で大原美術館と高梁市立成羽美術館との2カ所に所蔵されている児島によるエジプトコレクションをまとめつつある。
- (8) この折の展示即売会は、「埃及・希臘・波斯・支那古代美術展観」と銘打った大掛かりなもので、講演を行なうために招待された東京美術学校の正木校長は、その模様を日記に記している。正木直彦『十三松堂日記』第1巻、中央公論美術出版、1965年、pp. 265-267参照
- (9) 拙稿「天理参考館所蔵の古代エジプト遺物コレクション」『天理参考館報』第17号、2004年、p. 8参照。
- (10) 藤田亮策「考古学一般 一戦後の日本における考古学」『日本考古学年報』1、1948年、p. 3-5参照。
- (11) かつて外地でフィールドワークに携わっていた学者達が終戦直後に置かれていた状況に関しては藤田亮策、前掲書、p. 5参照。また終戦後に中近東でフィールドワークを再開していった状況については大津忠彦「日本人にとってのイラン古代遺跡―関心と調査研究への序章―」『日本イラン協会ニュース』No. 67、1997年、pp. 34-37参照。
- (12) 拙稿、前掲記事、pp. 8-9参照。

- (13) かつて同館の学芸員で現在大阪大学の藤岡穰教授は、エトルリア・ローマの陶器の収集が江上波夫教授の斡旋によるもので、その後所蔵品となったコプト美術品に関しては、当時の学芸員で後の京都市立芸術大学・佐藤雅彦教授のプロジェクトで購入されたものと推測している。
- (14) 中日新聞は、展覧会の内容や関連の記事を1958年2月9日から同21日にかけて頻繁に取り上げた。同年東京と京都で開かれた国際宗教学史学会に出席していたフランス人エジプト学者J. ル克蘭 (Jean LECLANT) 教授は、この展覧会の図録を見て、在日エジプト遺物を紹介した。
- (15) これらの2展覧会は、エジプトでのアスワンハイダム建設で水没するヌビア遺跡救済のための資金援助を目的に催された。
- (16) 発掘の経緯については、拙稿“Akoris throught the Predynastic to the Graeco-Roman Period : a brief outline” *Mediterraneus*, XVIII, pp. 111-124を参照。
- (17) 藤岡穰氏は、大阪市立美術館学芸員であられた1996年6月22日に開催された日本エジプト学協会シンポジウム「いかに、古代エジプトの文明の遺産を守るか」で「大阪市立美術館所蔵コプト石彫の修復について」と題した報告の中で劣化状態に驚き、悩み、修復処置ために奔走し、決断した心境を誠実に述べられた。
- (18) 遺物の塩類風化については、江本義理「概説—石の塩類風化について」『石造文化財の保存と修復』東京国立文化財研究所、1985年、pp. 51-53参照。また劣化と保存対策については、西浦忠照、平尾良光、海老澤孝雄「古代石灰岩レリーフの博物館収蔵中の劣化と保存処置」『第17回古文化財科学研究大会講演要旨』古文化財科学研究会、1995年を参照。
- (19) 過去3次にわたる修復処置の記録は下関市立美術館学芸員・岡本正康氏から戴いた。以下はその要約である。
- (20) 塩類をバルブに吸着させる脱塩処理を実施し、約1年後に再び塩類の析出があったために再度処理を実施した報告例としては、青木繁夫「土製品の保存・修復研究 I—塩類風化によって損傷をうけた土器の保存・修復—」『保存科学』No 24、p. 34参照。

謝辞

数年来筆者は、武内コレクションの起源を調査して来たが、昨年コレクション成立の事情にせまることが出来た。これは、調査中に、梁井新一氏、山口 保氏、武内茂和氏、泉 宏尙氏、山田敦雄氏 (目黒区美術館)、伊藤史湖氏 (久米美術館) から多大なご高配とご助力を賜ったことによる。これらの方々に深甚の謝意を表す。

エジプト遺物の劣化に対する良好な処置や検査結果は、筆者の要請に深いご理解と全面的なご協力とをいただいた下関市立美術館井土誠館長のご決断と救出に努力を重ねられている同館学芸員岡本正康氏の熱意の賜物であり、また岡本氏を中心に中村・水野両学芸員も加わって着実に実施された成果である。こうして劣化石造物の保存状態は改善の兆を見せているのは筆者の喜びである。なお脱塩処理効果を知るための塩類検査は、下関市水道局のお力をお借りしたと聞く。これらの方々に心から感謝の念を抱いている。そして、先ず何よりも同石造物救出のために持てる知識と技術とを惜しみなく戴いたルーヴル美術館エジプト部門クリスチャンヌ=ジグレル (Christiane ZIEGLER) 部長とマリー・フランソワーズ=ド・ロジエール (Marie Françoise de ROZIÈRES) 修復家に深甚の謝意を表さずにはいられない。また両人の過密な来日スケジュールを調節するために骨を折られたNHKプロモーションの神野聖子氏には深く感謝する次第である。

Egyptian Antiquities in Japan : Their Restoration and Preservation

Madoka SUZUKI

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2005)

Since the Meiji Era, small public and private collections of Egyptian Antiquities have been formed in Japan. For a longtime the purpose of the formation was not to develop the Egyptological Studies (Egyptology) but to be used an introduction to modern European sciences (medicine, archaeology etc.). These Antiquities are dispersed across the country. Some of them are in the critical condition for preservation : the deposition of soluble salts often damages the excavated Antiquities in Egypt. The case can be illustrated by the preserved Egyptian limestone block in Shimonoseki. Several practices of treatment by Japanese conservators did not improve on the damaged condition of the block. (as it is rare to find this kind of damage in the unearthed objects in Japan)

In the winter of 2004, I received the opportunity to examine the block with Dr. Christiane ZIEGLER, head of the Egyptian Department of the Louvre Museum. Promising for the help of Mrs. Marie-Françoise de ROZIÈRES, conservator of the Egyptian Department at the same museum, Dr. Ch. ZIEGLER encouraged me to form the Japanese specialized conservators group. The following spring (2005), Mrs. M. F. de ROZIÈRES made an examination of the block and advised me of the most classical treatment, which is the application of the pulp compress.

With permission of Mr. Makoto IDO, Director of the Shimonoseki City Art Museum, I organized a restoration team composed by the museum curators (chief of the team : Mr. Masayoshi OKAMOTO).

Treatment is a repeating process of applying the compress (which is the dampen pulp in distilled water) on the block until the dissolved salt disappears.

After the experience in the Shimonoseki City Art Museum, I would like to stress the importance of cooperation between conservators, archaeologists and curators in the actual preservation of Egyptian Antiquities in Japan.